

戦姫絶唱シンフォギアZ 神々の逆襲

クマ提督

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シンフォギアXVが終わり一年が経過し、世界の争いも沈めてみせた彼女達は…日常を謳歌しているそんな冬、12月。

クリスマスを目前に控え彼女達も浮足立っている…12月31日は皆で過ごしたいとの事もあり海外へ飛びだった装者達も日本へと舞い戻る

そんな時だった！遙か彼方、外宇宙より、10体のアヌンナキが現れる！

アヌンナキを倒すべく7人のシンフォギア装者達は立ち上がる

かの、アヌンナキらは自身の身を捧げ召喚した…

アヌンナキを統べる王を！

## 目次

Episode 1	遙か彼方、外宇宙の彼方から	1
Episode 2	日常はただ一つの過ちで、崩れ去る	9
Episode 3	隠蔽された、事故	14
Episode 4	絶望の力、奇跡の力で、勝機を掴み取れ！	17
Last Episode	戦姫絶唱、勝利を掴む為に、手を伸ばして	22

## Episode 1 遙か彼方、外宇宙の彼方から

切歌「さくあなたからメリークリスマスDEATH!」

調「切ちゃん…クリスマスまで後何日か知ってるの?」

切歌「それは…言わない約束デス!」

調「そんな約束した覚え無い」

切歌「ノリが悪い、調は置いておいて響さん!」

響「今!勉強中!黙ってて!」

ポカリ

未来「?勉強?響…さつきまでずっとゲームしてたよね?」

響「…あの時はあの時で…」

未来「勉強してるを、理由にしちゃいけません響は!」

切歌「お!という事は私にノツてくれると?」

未来「乗らないよね響?」

響「んく敢えて乗るとしたらクリスマスってエッチな…」

未来「そこに!そこに乗るの響!あなたは女子高生なんだからそんなおっさん発言はやめようね!ね!」

響「あれ?未来ってもしかして…そういう事した事…」

未来「ありません!私は純潔、真っ白けっけなんだから!いい加減しないと今度は本気で殴ろうか?」

響「ひ、ひえくやめてよく変な所触らないで」

未来「うりうりく響もやっぱりここは弱いのかな」

調(結局…イチヤイチヤしてる、これが雪音さんの恐れていた事態…これを見たらあの人は何と言うのだろう…)

切歌「話に変な方向に脱線しているデスよくぞ、そうだ!サンタさんは一体全体、誰なんでしょうね!」

調「え?」

未来「え?」

響「え?」

切歌「え?」

三人は集まり話をする

未来「調ちゃん…切歌ちゃんってそんな、メルヘンチックな考えを持っての？」

響「私達は…子供じゃないから、サンタさんの正体って分かってるんだよね！その…信じて許されるのは記録で見たセレナちゃん位が精一杯かな」

調「流石に…あの、常識人を気取る切ちゃんにそんな事は…」

切歌「ん？皆知らないんデスか？なら、常識人の切歌ちゃんが教えてあげるデス！」

調「大丈夫だよ！切ちゃん…無理しなくても」

未来「か、可愛いからうん！それがきつといいよ！」

響「サンタさんの正体は親つての知らなくても誰も馬鹿にしないよ」

二人「えいつ！」

響「な、なんで二人とも殴るの？」

未来「今！切歌ちゃんに合わせようとしていたのに…んも！響は本当に空気読めないよね！」

調「…はあ」

切歌「二人とも？サンタが親だって、それは当たり前じゃないデスカ！」

二人「へ？」

切歌「私達の親はサンタなのデス、そして、親から生まれて来た私がプレゼントなのデスッ！」

未来「…それ、親御さんが聞いたらきつと喜ぶと思うよ」

切歌「私の、本当のお母さんと、お父さん…元気にしているというのデスが…」

調（私は…恐らく死んでいるのだろう微かに断片だけど今も車に乗ると何故か想い出す風景と言う物が私にはある…

というか切歌ちゃんの親も生きている確証なんて、ない…子供が人体実験に使われると聞いたら普通は取り戻しに来るはずだ…）

そんな重い話をした所で本編という世界は、12月14日というクリスマスまであと僅かという子供達は浮足立つ日、親は出費を減ら

す時であろうそんな頃にやって来る最悪を倒す物語が今！始まる！

タイトル 戦姫絶唱シンフォギアZ 神々の逆襲

翼「しかし、例の合衆国と中国の件も上手くまとめられて見事だと  
尽きない訳だが…」

弦十郎「しかし…歌手の三人は年末は忙しくないのか？」

マリア「？紅白に呼ばれて無いのは、尺も承知でしょ？だってあれ  
大分前に入る人決まるでしょ？」

弦十郎「カウントダウンするテレビは？」

翼「そもそも、私達はカウントダウンするテレビには呼ばれた事が  
無くてだな」

弦十郎「という事はお前たちは…年末は暇なのか？」

三人「そういう事よ、そうなるな、だな」

弦十郎「うしっ！国家間の争いを沈めたお前達に祝の一つでもやる  
か！」

響「パーティーやるって事ですか？」

翼「そのようだななるべくその時は予定を開けておくように、特に  
装者は絶対参加の流れだからな！」

切歌「やったーチキンとか！ケーキとか！いっぱい食べるデスよ  
〜」

調「太っても…知らない」

切歌「と、いつつ調べもかなり食べるじゃないデスカ〜」

調「！うるさい…」

クリス「ま、食べてもらわ無くちや余って仕方ないからそつちの方  
が良いだろ？」

響「そうだよね〜私も限界まで食べまくろ〜と！」

クリス「おめーの腹の限界まで食べられたら！みんなのパーティー  
じゃなくて、お前だけのパーティーになっちまうだろうが！少しは加  
減しろ！」

響「え〜未来？加減しなくちやいけないの？」

未来「当たり前だと思う…だって、響…すたみな〇〇全店で出禁何  
でしょ？」

響、未来以外「へ？」

未来「夜の分まで食べちゃって…ブラツクリストに登録されたらしい…」

響「酷いんだよ、あのお店！」

マリア「多分、私達だと」

切歌「その肉を見るだけで気分が悪くなるレベル…」

調「もしかしてその量…豚さんや、牛さん一頭分丸々だったりして…」

エルフナイン「はつきり言いますね響さん！あなたの食欲は異常です！」

響「えへへ…」

みんな「褒めて無いつ！」

ウウーン！ウウーン！

エルフナイン「警報!？」

クリス「今日…訓練でもあったっけか？」

朔也「東京直上に、敵性反応！シンフォギア装者に対して、出撃命令が日本政府より出されました」

弦十郎「よし、安保理を適応！お前達、久しぶりの実戦だ！」

みんな「はいっ！」

友里「装者、7人スタンバイOK！」

朔也「東京直上の敵性反応…本部メインバンクに登録されている反応です！この…反応！嘘だろ…」

弦十郎「どうした、朔也君！」

朔也「アヌンナキ…東京直上にいるのは10体のアヌンナキです！」

弦十郎「まさか！神が10体だどっ！」

未来「シエム・ハさんが言ってた…「我々、アヌンナキは全部で12体…我とエンキはそのうちの二体だ」

クリス「嘘だろ!?じゃあアイツらは…シエム・ハ達と同レベルかもしくはそれ以上って訳か!？」

アヌンナキ イヴ「彼女達が、シンフォギア装者？」

響「争いなんて止めましょう！」

イヴ「あなたがその気でも人類はやる気みたいよ？」

響「そんな…」

隊員「目標、上空の敵性反応体！射撃開始、繰り返す！射撃開始！」  
ドゴオンとアヌンナキらに砲撃は…命中しなかった、玉はアヌンナキに当たる直前にスルスルつと地面に落ち炸裂した

隊員「なんだと…砲撃が効かぬとは…」

隊員「へり部隊！機関砲による銃弾の雨を降らせよ！」

ババハババツと射撃が開始されたがこれも一切当たらず地面へ弾頭が落ちてゆくだけのただの銃弾の消費である

隊員「なす術無しか…」

イヴ「その程度か…ならばこちらから行くぞ！」

アヌンナキは可視波長の謎の光線を戦車大隊、対戦へり部隊へ浴びせた。すると無線からは阿鼻叫喚の叫び声が木魂する。

響「何したの？」

イヴ「この光線は戦車のような分厚い装甲板すら無効化し貫通させて中の人間を言わば電子レンジ内部と同じにする！」

切歌「電子レンジにするとどうなるデスか？」

調「…電子レンジの中に人を入れると身体の中の血液が沸騰して…死に至る」

切歌「そんな…酷すぎる殺され方デスよ…止めるデスッ！」

イヴ「止める…訳が無かろう！止めたければお前達が我らを倒し止めるのだな！嫌と言うのなら…避難所を！」

響「…やめてよ…やめてよ…罪の無い人々を殺すのは…やめてよ…」

イヴ「人類等、元々原罪を…」

響「関係ない！人が生まれべくして持っている罪なんてそんなのあなた達が勝手に決めてるだけだ！」

イヴ「そうだな…そんな事にすら気づけない人類など！もはや我らにとっては蚊をひねり潰す事と同義！」

マリア「弦十郎！避難者を早く、別の避難所へ！」



弦十郎「2000人も収容出来るのはここぐらいしか…」

イヴ「茶番は終わりだシンフォギア装者…自らの無力さを呪うと良い」

響「やめろおおお！」

バシユツン

「助けて…身体が熱いよ…ママ！」

「みさきちゃん…ママが付いてるからね…」

「ぎあああ！死にたくない…死にたく」

黒服「…こちら避難所、甚大な被害を受けた…どうぞ」

弦十郎「お前たちは良くやった…今はゆっくり…」

友里「避難所…通信途絶」

弦十郎「クソ神どもめ！これでも、神を名乗るのか！お前らは…悪魔だ！」

イヴ「何とでも吠えるが良い…」

響「…お前たちは！倒さなければいけない敵だ！みんな行くよ！エクストライブ…いや！バーニングエクストライブだ！」

翼「シエム・ハを倒した時の形態か？今は、そこまでフォミックゲインは…」

エルフナイン「フォミックゲイン、急速上昇中!?なんで…これも7つの音階…7つのシンフォギアの力？」

響「みんな！いこう…最悪を倒す為に強くなろう！」

みんな「バーニングエクストライブ!!」

奇跡が起きたのか、7つのシンフォギアは決戦機能、バーニングエクストライブmodeの展開に成功した。

「…」

アヌンナキ「イヴ！どうするのだ？あの攻撃…我らでも防ぎ切れぬぞ！」

イヴ「手筈通りだ、作戦に支障は無い…我らは我らの計画を進めるまでだ…」

みんな「オーバーブレイブ！」

イヴ「…そういえば神殺し、お前はアダムを倒したようだな」

響「それが…どうした!？」

イヴ「アダムは…私と対を成す存在、だが我との生存競争に敗れ、実験場に置き去りにしてきたが…死して奴は我らを呼び寄せた。

そして、太陽系に来てみれば我が同胞…シエム・ハを撃破した存在がいた…それがお前達だな？」

響「話を逸らすな!最短で、最速で、まっすぐに、一直線に!」

アヌンナキらは刀を取り出した。

翼「そのような刀で私達を倒せると思うな!」

ザシユツ

響「へ…?」

アヌンナキは自分に刃を刺しこのように述べた。

アヌンナキ「我ら、アヌンナキ!我らの命を賭して問う!我らがアヌンナキの王の…」

イヴ「帰還を!」

その瞬間、空は瞬く間に黒く染まり雷鳴が鳴り響きアヌンナキがいた所へと落ちる、そして—

ゼウス「ほお…我らの改造執刀匠、シエム・ハを倒したのはそなた達…シンフォギア装者という訳か…奴の力も堕ちた物だな…」

我はゼウス!アヌンナキ…神々の王、全知全能の神である」

響「何が神々の王だ!こんな酷い事をする神様なんて!シンフォギアで殺してあげるっ!私達の…軌跡を舐めるな!」

ヒユツン

クリス「は、早い…」

ゼウス「軌跡か…この程度の軌跡で良く軌跡と語れたものだな…」

我に軌跡は疎か…奇跡など通じんよ!」

ズバツアーン

その、強烈な一撃を直撃で受けたシンフォギア装者は変身を強制解除されてしまった。

エルフナイン「そんな…アームドギア、アブソリユートキャンセル?弦十郎さん!シンフォギアはあの子達のギアは今!」

弦十郎「お前達!逃げるんだ、奴に勝てる奴はいない!早く戻れ!」

クリス「つたあ…つて！響!?お前何やってんだよ、降りてりてこい！」

ゼウス「神殺し…貴様だけは直接、我が葬り去ってやろう…前にも始末を損ねた事があるようだな！では、入念に行かせて頂こう！」

未来「駄目えええええ！」

ゼウス「神の裁きを受けるといい！」

ズゴツン

未来「…響いいいいいい！」

ゼウス「人類を絶望で満たすにはまだ、少し足りないな…また来よう…」

これがアヌンナキの王…ゼウスの実力であるのであった…

次回に続く

## Episode 2 日常はただ一つの過ちで、崩れ去る

エルフナイン「早く！早く医務室へ！」

医者「生命維持に、全力を注げ！緊急手術を行う！なんとしてもこの子の命の灯火を守るぞ！この子は…我々の切り札なんだ！」

エルフナイン「まず、皆さんが無事だったのはアマルガムがゼウスの強すぎる攻撃に自動作動し、各シンフォギアが装者の身の安全を図った為、皆さんは比較的軽症ですみました」

エルフナイン「響さんは…その攻撃を解除後も受けた為…2発目は人体で受けており…」

エルフナインが重い口を開いた。

エルフナイン「この状態が後数日続いた場合、生存率が格段に下りますもし、例えば意識が回復しても…一生、寝たきりになる可能性も…」

未来「エルフナインちゃん…」

エルフナイン「はい…」

未来「響は…死ぬの？」

エルフナイン「…それは、響さんの頑張り次第です」

未来「…響が死んだら！恨むから！エルフナインちゃんを一生…恨むから…恨むから！」

翼「…小日向っ！私も奏が死んだ時、何もしなかった自分を恨んだ…しかし、エルフナインを恨む姿を見たら立花は…どう思う？」

エルフナイン「良いですよ…翼さん、恨みを買うのは…慣れてますから僕なんかで…よ、良ければ恨んで下さい、それで気が少しでも紛れるのなら」

未来は涙を流して、全く動かない立花響の胸で静かに泣き伏せる

クリス「バカ野郎…寝てるんじゃないやねーよ、嫁を泣かすなよ…なあっ！ふ…ふえ…ちよっと外行ってら」

調（クリスさんは、明らかに涙声だったし…泣いてた…切ちゃんはさつきから鼻すすりまくってるし…目、（っム）ゴシゴシしてるし私

？みんなが泣いたら前に進めなくなるから…悲しみを噛み殺してグツ…耐えてる…慣れてるから！うん…？慣れてる？私にもこんな事があったの？覚えて無いけど)

マリア(お願い、良い神様…響を助けてあげて…セレナ…？セレナ？妹のようににはさせないもう、大切な人を殺させはしない！)

響の微かな混濁した内面の意識に現れた、かの日のかの世界で別れた少年の残像を表して

響「ここは、どこだろう」

シエム・ハ「久しぶりだな神殺し…」

響「私…神殺しって言うの？」

シエム・ハ「うん？貴様…自分の名前も分からぬのか？」

響「はい…」

シエム・ハ「では…この少年もか？」

シンジ「響さん！僕ですよ！シンジです！」

響「シンジ君…誰だっけ？」

シンジ「なら…口づけで！」

チュツ

響(ンアツ…あれ？私…これ、自分からやった事あるような…あれ？この、温かい感触…唇の感触…キスの味…あっ！思い出した)

「シンジ君…もう二度と会えないと思っていたけれど…また、会えた！」

シエム・ハ「思い出したか立花響…」

響「！シエム・ハさん！お願いがあります！私を、本来の小日向未来の元へ返して下さい！」

シエム・ハ「良いのか？また、戦いへ身を投じるのか？このままここでシンジと過ごしても良いのだぞ？」

響「私は未来とつて太陽なの…太陽が無くなったらみんな、特に未来は困るの、だから…お願いシエム・ハさん！」

シエム・ハ「分かった、良いだろう戻そうお前を…いつの日かまた、会おうぞ」

響「はい！」

響が返事をする、眩い光が目の前に見える

響「知らない天井…いやっ！知ってる天井だ！」

未来「響…？」

エルフナイン「響さん!?立ってますか？」

響「え?ちよつとボケくとしちやうけどほい！」

響はベッドから起き上がるように立ってみせた

響「イタタ…」

エルフナイン「…まさか、後遺症も何も発症しないなんて…奇跡が起きたのかな…あ!先生を呼ばなきゃ！」

医師「問題…無いですね」

未来「良かった…良かった…」

医師「むしろ…問題がある方が多いですよ…ここまで意識不明だと」

診断の結果、流石に全身を打撲したような痛い感覚はあるがエルフナインが危惧した、一生物の怪我は負わずにすんだ。

弦十郎「響君!無事だったようだな!良かった…」

響「作戦があるんですね?そう、皆から聞きました。」

弦十郎「ああ、全知全能の神…ゼウスの攻撃後、この地点に何らかの動きがあったようだしかし…響君は休みたまえ」

響「その地点には何が…はい、そうですね」

弦十郎「地点Aは日本、そして、B地点は…ウクライナ、現在のチェルノブイリ原発所跡付近だ」

ウクライナ チェルノブイリ原発所跡付近

切歌「ここが、チェルノブイリ原発所跡…デスカ…」

エルフナイン「はい…皆さん!防護服とマスクは付けましたか？」

翼「その手にある装置はなんだ？」

エルフナイン「ガイガーカウンターと呼ばれる放射線を計測できる装置ですTERRAなんちゃらって書いてありましたねその黄色Versionですね…」

切歌「やっぱ高いんデスカ?数値は」

エルフナイン「ええ、高いですよ…やっぱ放射線事故は向こうを

永遠に穢す事になりますからね…」

全員、バスを降りて反応が示す場所まで歩く

響はその国のホテルにて、休養しながら他の装者の無事を祈る…何かあれば彼女も駆り出される身であるから

マリアは神妙な顔立ちで歩いている

マリア「ここが…私の本来の生まれ故郷」

調「生まれ故郷？マリアは確か、ウクライナの首都で生まれたんじゃない？」

マリア「おじいちゃんはね…事故が起きた時、チェルノブイリ原発で作業員として働いていたの、その日は丁度非番であそこにはいなかったみたいだけど…事故後もおじいちゃんは自分の職場がしでかした人類史上最悪の原発事故の作業員として働いたの

せめて、少しでも、未来の私達に…この惨劇を見せまいと、もうこんな惨劇はもう二度と起こさせ無いと…願い、死んでいったの癌が原因でね…過去の世界が起こした悪夢をこれ以上、先の世代に引き継ぐ訳にはいけない！」

そして、反応があった所へ装者達はたどり着いた。

緒川「敵性反応!？」

切歌「…なんデスと！」

調「とうか、何か敵…形が崩れてる？何これ…」

マリア「まさか…放射能!？」

「そのとおりだ…」

そこに現れたのはシエム・ハであった。

翼「シエム・ハ…」

マリア「やはり…人類が間違っていたのかも知れないわね…」

シエム・ハ「自然の摂理を壊しこの地を変えたのは他ならならぬお前達、人類である…」

翼「血塗られた人の歴史…否！我々の手によって変える…変えてみせる！」

シエム・ハ「フツ…貴様らも武器を持っているだろうが！」

切歌「これは…シンフォギア！」

調「人類の希望…バラルの呪詛が無いのなら！」

マリア「世界は…人類は…一つに！戦争の無い世界に出来るかも知れない！」

シエム・ハ「…フフツお前達なら、そう言うと思っておったぞ」  
マリア「!?!」

シエム・ハ「ゼウスか…厄介な相手になったな」

切歌「力を…貸してくれるんデスカ？」

シエム・ハ「確かに…人の歴史は血塗られている…それを変えてみせると言うのだろ？なら、我の力を貸そうぞ…神殺しはどうした？」

ウクライナ首都 ホテル

響「…回復した？」

シエム・ハ「デバイスンウエポンの例の平行世界へ肩代わりさせる技の応用よ…」

響「つて事は…ムスツとした響にダメージが…」

シエム・ハ「ムスツと…？」

切歌「これで！神殺しも復活して万々歳なのデスカ？」

シエム・ハ「我が与えられる力は…「絶対なる障壁」《アブソリュート・バリア》のみである…これは防御技だな…攻撃となると奴しか居らん…」

響「教えて下さい！奴って誰ですか？」

シエム・ハ「エンキ…奴しか居らんよ…攻撃を司るアヌンナキは」  
次回につづく



## Episode 3 隠蔽された、事故

ブロロ〜と装甲車が駆け抜ける途中、バリケードを通ったがその先では草で道路は茫茫、辺りには廃屋が立ち並ぶ…

ここは…福島県のとある場所、福島第一原子力発電所、かの大震災の際チエルノブイリ原発クラス事故を起こしてしまった場所であるこちらはどちらかという天災が直接的な原因で有るが…

マリア「復興まで…後数十年？やはり放射能は人を、環境を、何もかも狂わせるわね…」

エルフナイン「皆さん！防護服の着用をお願いします！」

切歌「もう、廃炉になりそうなのに…人は戻って来ないのデスか？」  
職員「戻らん…というか戻りたく無い人が大勢だろうねえ…私はね子供の頃、双葉群の生まれでね…10歳の頃、震災に巻き込まれその頃住んでいた家は…今も、あの場所に…朽ちて、果てて、廃屋になっているだろうねえ…」

調「それを…その事実を、当時の政府は隠蔽しようとした…隠そうとしたんですよ？」

職員「ああ…そうさ！所詮アイツらは、責任の押し付け合いで一杯さ！自分達には関係の無い話だもんな！」

マリア「結局は…自分達で助け合って生きていかなくちやいけない…それに限るわね」

エルフナイン「でも…後、数十年もすれば廃炉になるんですよ？」

職員「ああ…それまでは俺達が働かなきゃいけない…親父の最後の願いでもあるからな…」

「私達の世代が作った負の遺産を、お前達の世代で終わらせるんだ」  
彼女は、原発を見下ろせる丘まで来た。

響「これは…」

職員「出土作業、ここを掘る作業をしようとしたらここに剣が刺さっておってな…研究の結果、これは聖遺物と分かったのだ」

クリス「!?聖遺物ってマジかよ…」

???「抜けるかな!?その剣が君達に！」

マリア「…エンキ」

エンキ「ああ！シエム・ハから話は聞いている…力は貸そう…しかしその剣が抜けないと話が進まないぞ？」

響「えへへ〜私が一発で！」グイイ〜

「無理…だった…」

みんな「!?なんだって」

翼「私も無理だな…」

クリス「近接は私には合わないもんな…」

切歌「無理デス…」

調「…無理」

未来「重いね〜」

マリア「…私!?無理無理よ〜」

ツポン

マリア「抜けた!？」

切歌「凄いデスよ！マリア」

調「…うん」

翼「流石だな」

響「凄いです！マリアさん」

エンキ「…流石は我が右手を纏うシンフォギア装者であるな！しかし…ゼウスは何処に居るかは私にも分からぬのだ」

エルフナイン「本部に戻りますか…」

本部

エルフナイン「解析結果出ました！やはり、この剣は聖遺物ですね！その名も…【叢雲の神剣】です」

弦十郎「…しかし、これでゼウスとどうやって戦うのだ？奴は何処にいるかも分からんのに…」

ツピー、ツピー

友里「！発信源不明の通信が来ています！」

弦十郎「繋いでくれ！」

「成功したようだね、どうやら僕の目的は…」

マリア「この…独特な喋り方！もしかしてアダム？」

アダム「バレてしまったか、僕の事が！先程の剣は僕の武器だからね、元々」

響「…何がしたいんですか？」

アダム「…今回は、助けようと思う君達を…何故かって？この僕を否定したのだよ！ゼウスは！」

弦十郎「…そうか、で？奴は何処に居るんだ？」

アダム「奴の神話の住処は何処だ？ゼウスの！」

エルフナイン「はっ！まさか…アテネのゼウス神殿!?」

アダム「行くがいい！シンフォギア装者よ！絶対神を倒す為に！」

ゼウス神殿

響「ここが…ゼウス神殿！」

マリア「神の御前って所かしら？」

エルフナイン「うんと…ここからどうしたら？」

「また…来るとは愚か者達であるな！」

響「ゼウス…」

ゼウス「また、敵となるかシンフォギア装者よ！ん？ほお…シエム・ハの防壁にエンキの剣か！そのような装備で我に勝とうなど！思い上がるな！」

響「だけど…私達は！希望を信じて、絶望に抗い、今日まで強敵を倒して来たんです…私達は…諦めない！みんな行くよ！」

「絶唱だああああ！」

ゼウス「ほお…これが、この力が絶唱か…我の力で、壊してくれよう！」

その時、装者は宇宙へと飛ばされた。

ゼウス「ここで、あれば全力を出せるな…安心しろ空気はある！」

弦十郎「お前達!!」

次回へつづく

## Episode 4 絶望の力、奇跡の力で、勝機を掴み取れ!

弦十郎「お前達!? 一体何処にいるんだ?」

朔也「エルフナインをゼウス神殿にて確認! ヘリを向かわせました」

友里「ギアからの信号検知! ここは…衛星軌道上です!」

弦十郎「浮いて…いるのか!?!」

ゼウス「ここで、なら…何者にも邪魔をする事は出来ぬな」

シンフォギア装者達は、絶唱を唄い…神様を倒したかの日のギアを纏う

響「これが! 私達の」

「シンフォギアの力だああ!」

響「二人の神様がくれた…この力を! みんなの力を合わせて!」

みんな「天を穿ち、神をも貫く! 私達の…アームドギア!」

響「エクストライブで! 大切な物を護る為に、私達は!」

みんな「神様を倒すんだ! どおりやああ!」

ゼウス「しかし…我を超えるほどの力では無いな!」

ズバツ! ザシユツ

響「…なんで、なんであいつに勝てないの?」

翼「何の…これしき!」

エルフナイン「皆さん! これ以上は身体に危険が…」

クリス「人を護って死ぬなら…本望だぜ!」

切歌「うん…覚悟は出来ているデスよ」

調「…うん」

マリア「神様を…超える! こんな、悪魔みたいな絶対神に負けたくなど…無い!」

ゼウス「しかし、現実を受け入れろ…我に叶わぬと!

思い知れ! シンフォギア装者よ!」

数多の強敵をこれまで相手にしてきたシンフォギア装者達もゼウ

スの圧倒的な力の差に叶うはずも無く、絶望した。

ただ、一人を除いて

響「諦めない…正義は…願いは…必ず叶うんだって証明してみせる！」

ゼウス「フフフツ、今度は貴様だけは必ず息の根を止めてやろう…我に！恐怖せよ！圧倒的な力の前で！」

ズバツ！

未来「響いいいい〜！」

響「…シンジ君、あなたの力を使うね…絶望に打ち勝つ為に…魔槍、ガングニール！」

その時、ガングニールは立花響の願いを受け入れあの時の兵装とATフィールドを引つ提げ復活したのであった。

ゼウス「神殺しが、神殺しの力を更に纏うか…しかし！我に叶う等と自惚れるな！」

ズバツ

ピキーン

響「はあ…はあ…エンキさんの…倍以上の力だ」

ゼウス「エンキ如き…私の足元にも及ばんわ！これで、終わりだガングニールの少女よ！」

響は目を瞑った。

目をそつと開けるとアマルガムが作動していた。

響「一発殴らせろお！」

バキツ

ゼウス「くっ…しかし！我が負けるはずなど！」

2発目は交わされ、返り討ちに合いそうになる

翼「立花を、守るぞ！天羽々斬！」

クリス「イチイバル！」

切歌「イガリマ！」

調「シルシャガナ！」

マリア「アガートラーム！」

みんなの願いは一つ、立花響を守り通す事」

そのシンフォギアの技により何とか体は守られたのだが…

響「うう…くっ…はあ…はあ…身体が言うこと聞かない…」

他のシンフォギア装者もエネルギーが切れており動く事は不可能に近い。

ゼウス「…やはり、所詮われに叶う等…有り得ぬと言う事だ！

死して我を呪うが良い、我に…跪け！」

立花響でさえこの圧倒的な力には目を閉じるしかする事が出来なかつたしかし…そんな時、あの日、あの時に、悲劇的な別れをしてしまったシンフォギア装者が現れる。

人類に残された最後の希望の光を纏い、奇跡を起こす為に。

??? 「影縫い！」

翼 「影縫い!? 私の技を、一体誰が…ってあれは!?!」

??? 「みんなの回復を、頼むぜ！」

??? 「はい！ヒール、スプラッシュ！」

切歌 「うお、傷が回復してくデスよ」

調 「あの、白い純白のギアは…」

マリア 「まさか…セレナ!?!」

セレナ 「お姉ちゃん…やっと会えたね！」

翼 「そんな…奏だ?!」

奏 「何だよその反応く会いたく無かったのか?」

翼 「そんな訳が無からう！」

ゼウス 「何故…動けんのだ！」

奏 「神殺しの伝説は、響ちゃんのギアだけに起こった出来事じゃあ…ねえだろ? アタシのギアも…マリアの使った黒いガングニールも…神殺しだろ!?! そうすれば神殺しの影縫いは…足止めすりゃ…強い!?! そういう訳だ!」

セレナ 「私だって…やる時はやるんだからね! みんなを助ける為に…!」

響 「九人だけじゃない…私が束ねるこの歌は、生まれた者、死にゆ

く者の全てを束ねた！」

みんな「シンフォギアだあああああ！」

「それでこそ、立花響お前だな！」

「私達の…この溢れる思い全部載せて！」

「神を…これまでの歴史に風穴を開けるワケダ！」

「勝つこと以外…考えるな！踏みつけるぞ？」

「マスターが勝てと言う訳です…我々も応援させて頂きます！」

「地味に…いや！派手に打ち勝て！」

「私達を…倒したその力で勝たないと！怒るからくそこん所よろしく」

「アタシ達では勝てない相手だから…また、変身して勝つんだゾ？負けたら怒るんだゾ！」

「私達に教えてくれたわよね？大事な事を！人として大切な事を！」

「負けないで欲しいんだぜ！何よりも自分から！」

「勝つであります！私めもそれを願ってるであります！」

「ウハハア！この僕に勝つたんだ！負けたら許さねえ！」

「勝利を…掴みなさい！白いガングニール」

「今こそ歌いなさい…その胸の歌を！勝利を手に入れたいのなら！」

響「行こう、みんな、希望《シンフォギア》を信じて！」

みんな「オーバードライブ！」

響「最速で！」

それ以外のシンフォギア装者「最短で！」

響「真つ直ぐに！」

みんな「一直線にいいいい！」

ズバアアアと一直線に貫いてゆく…

それは全ての生命を乗せて、希望を乗せて、奇跡を起こす為に！

ゼウス「クツ！しかし、それ程の力で殺られる私では無い…」

響は九人の輪より離脱し光を放つ

みんな「行け！立花響！」

未来「行っけえ！響く神様を超える為に！神様を殺す為に！」

みんな「神様を倒す為に、行け！神殺し！」

光は更に強くなり立花響のガングニールは新たなシンフォギアへと進化した。

その名も、戦姫神シンフォギア 神様を殺す存在が神へと進化した瞬間であった。

次回、戦姫絶唱シンフォギアZ 神々の逆襲 最終章

Last Episode 戦姫絶唱 勝利を掴む為に、手を伸ばして



Last Episode 戦姫絶唱、勝利を掴む為  
に、手を伸ばして

響「これが、私の…私達のカ！戦姫神シンフォギアだ！」

友里「ガングニールの反応が…新たなアフヴァツヘン波形に信号  
が変わって…」

弦十郎「神を…纏ったのか？シンフォギアの名を冠するシンフォギ  
アを！」

響「これが…私達の！人類の歴史の産物です！世界を、照らす光と  
なる！シンフォギアでええええ！」

ゼウス「人間如きが神を名乗るなあ！」

ヒュッソ

ゼウス「何!?消えた？」

切歌「攻撃を受ける直前に消えたデスよ？」

調「まるで…質量を持った」

未来「残像…」

クリス「って…違うアニメじゃねーか！」

翼「しかし…あの早さ！いけるぞ！ゼウスの反応速度を超えろ！立

花！」

響「はい！」

ゼウス「質量を持った残像とでも言うのか!？」

響「この力を使ってあなたを…越える為に私達は！」

翼「ああ…分かっている！天羽々斬！」

クリス「イチイバル！」

切歌「イガリマ！」

調「シルシャガナ！」

マリア「アガートラム！」

未来「神鏡獣！」

セレナ「アガートラム！」

奏「ガングニール！」

サンジェルマン「私とあなたでまた、咲き誇らせよう！熱く燃える情熱を！」

カリオストロ「生命を！歌に乗せて！」

プレラーティ「後悔が残らないように切り開くワケダー！」

キャロル「フツ：立花響！世界を：救え！その胸の歌で！」

ファラ「切り開け！」レイア「魂、賭して！」ガリイ「あたし達を越えた：」ミカ「アームドギアの力で！」

ヴァネッサ「私達に教えてくれた：」ミラアルク「人として大事な事を：忘れちゃいけない事を：」エルザ「今度はこちらが教えてあげるであります！」

ウエル博士「ブハハツ、ネフィリムを食べたその力を！今解き放て！」

ママ「マリア、切歌、調：あなた達も力を貸しなさい！神殺しへと！」

フィーネ「：願いは、時を越えて、場所を越えて：今！ここに！神殺し：いや！立花響！胸の歌を：今、歌いなさい！」

響「みんながくれた：この想い！この力！全ての尊き：生命のシンフォギアなんだ!!!」

みんな「いつけえええええ！」

シエム・ハ「ゼウス様！」

エンキ「ゼウス！」

ザシユツ

ゼウス「：世界は神殺しを選ぶという訳か、よい：それが世界の選択という訳であるのなら：」

響「世界を：守る為に、私は：私達、シンフォギアはある！悲しみを生み出さない為に：神様は、そつと私達を見守ってくれるだけで嬉しいよ：」

数時間後

シエム・ハ「ゼウスを撃破とは：見事であったぞ、神殺し」

響「えつと：？ありがとうございます？」

エンキ「絶対神を倒すには我らの力だけでは無理であるからな…礼には及ばんよ」

翼「…逝くな、奏！」

奏「？」

マリア「やつと…巡り会えたのに、もう別れるのなんて…お姉ちゃんには嫌よ！」

セレナ「…お姉ちゃんも、翼さんも何を言ってるの？」

奏「まるで…アタシ達が死んでるみたいなのを言うなよ!?縁起でもねえ！」

翼「一体、何を…奏は、あのライブで」

奏「ライブ?…あ!あれか…絶唱を歌う直前にシエム・ハさんが現れて…」

翼「…まさか」

マリア「セレナ?あなたも…」

セレナ「うん…歌おうとした直前に…」

シエム・ハ「フフツ、槍があればやり直せる…エネルギーやら色々使うからあまり使いたくは無いがな」

翼「奏…生きて、いるのだな?」

奏「…胸でも触るか?」

翼「…うん」

ダキツ

マリア「…セレナ！」

セレナ「…お姉ちゃん！」

ダキツ

シエム・ハ「壮観である。では…エンキ行くぞ」

エンキ「ああ…」

響「…シエム・ハさん、お別れですか?」

シエム・ハ「…違うな、お主が言ったであろう?」

響「え?」

シエム・ハ「神様は、そつと私達を見守ってくれてるだけで嬉しいと響「あ…」

シエム・ハ「その通りであろう。暫しの別れであるが永遠の別れは無い…また、来たるべき時に我は現れるその時まで、何処かで見てみよう」

響「…はい！」

シエム・ハ「では、暫しの別れである！シンフォギア装者よ…」

そして、物語は更に進む。

一週間後

裁判長「被告、風鳴訃堂を殺人、殺人教唆、大量殺戮教唆、国家反逆罪、銃刀法違反等の社会的地位等を鑑みて判決を言い渡す、被告人を死刑に処する。」

訃堂「儂きかな、国家に尽くした愛国者を…死刑に処するとは…」

裁判長「被告人、発言を禁ずる」

???「…見損なつたぞ人間共め」

裁判長「…被告人！何を！」

その瞬間、辺りを爆風が襲う

翼「…緒川さん、状況は？」

緒川「風鳴訃堂の発言後に爆発が襲い…おそらく、発端は訃堂かと…」

朔也「爆心地に高エネルギー反応検出！これは…アヌンナキ!」

マリア「まさか…一体何者!」

「我は…この地の神！天照大神である！」

クリス「天照大神だあ!」

セレナ「…おじいちゃんの筈なのに胸がある」

モミ、モミ

サワ、サワ

天照大神「今の我の身体は完全に女子である！元の身体がどうであるか等、関係ない！」

マリア「そう…まあいいわ関係の無いことね！」

天照大神「…？神殺しはどうした？」

シンフォギア装者は上を指差す

天照大神「…しまった！」  
へりから飛び立つは我ら、人類の切り札神殺し…その拳である！  
響「行くよ…ガングニール！胸の歌がある限り…  
これが…私達の！シンフォギアだああ！」

つづく

Another Story

【ノーブルレッド、再誕！】

エルザ「…ここは、何処でありますか！」

「くう…くう…」

「もお…食べられないんだぜ…エルザ…取るなよこれは…アタシの…」

エルザ「起きるであります！二人とも！」

ヴァネッサ「はっ…寝ていた!？」

ミラアルク「ご馳走は…」

エルザ「夢で…あります！」

ヴァネッサ「…というか！私達は世界から消え去った筈よ!？」

ミラアルク「そういえばそうだぜ!？」

エルザ「ここは…風鳴邸地下でありますよ!？」

シエム・ハ「久しぶりであるな！怪物共」

ヴァネッサ「…シエム・ハ！良くも騙したわね！」

シエム・ハ「あくそうであつたな、あの時は済まぬことをした。」

ミラアルク「えらく腰が低いなという風の吹き回しだ？」

シエム・ハ「貴様らを復活させたのは我であるぞ？」

ヴァネッサ「復活!?!なぜ？」

シエム・ハ「お前達は…人間に戻りたくは無いのか？」

エルザ「戻りたいで…あります！」

シエム・ハ「身体を…見てみる」

エルザ「…まさか！」

ヴァネツサ「エルザちゃん！ちよつと脱いでみて！」  
脱ぎ脱ぎく

ミラアルク「…女の子なんだぜ」

ゴンツ！

ミラアルク「…何をするんだぜ」

エルザ「／／前から見るからであります！」

ミラアルク「アタシも…女の子なんだから見たっていいじゃんか  
！」

ゴフツ

エルザ「／／そういう問題じゃ無いであります！少しは恥じらい  
を持ってであります！」

シエム・ハ「壮観である！」

ヴァネツサ「…あなた、こういうのが好きなのね」

エルザ「テールアタツチメント…いや、普通のお尻になっているで  
ありますか！」

シエム・ハ「まあ…な。貴様らを人として生まれ替えさせてやった  
…何、生活に困っているのなら…ここへ迎え！」

エルザ「…紙切れでありますか？」

ヴァネツサ「ここは…横浜港？」

ミラアルク「…ネットワークで調べてみたら、ここに

songの本部が…そういう事なのか？」

シエム・ハ「あやつらであれば仕事の一つや二つ余っておるであろ  
う？」

ヴァネツサ「…分かったわ！ありがとう、神様！人に…生まれ替え  
させてくれて！」

シエム・ハ「体術等を…一応、強化はしておいた。使う事は無いか  
も知れんがな」

エルザ「ありがとうで…あります！」

ミラアルク「感謝だぜ！」

フツ

ヴァネツサ「さて…鎌倉の奥地から横浜港を目指すわよ！」

3人「おお〜！」

少し歩くと山道に人だかりが出来ていた。

ヴァネツサ「どうしたのですか？」

地元の人「放置車両があつてね…なんでも持ち主はどうやら心中したらしくてな」

車屋の人「どうするよ…年式は新しいけど、売れるか？心中した車両なんて…」

ヴァネツサ「あの！私で良ければ買いますよ！」

車屋の人「…嬢ちゃん、免許は？見たところ外国人見ただけど」

ヴァネツサ「この通り！国際免許、A級よ！」

車屋の人「…本部に連絡して来ます。」

警察等とも話し合った結果…一応仮として貰う事が出来た。

車屋の人「じゃあ…お金はまた、後日で！一応、仮として…車庫が見つかったら連絡下さい」

ヴァネツサ「はい！」

ブロロ〜

エルザ「大丈夫でありますかね？」

ヴァネツサ「車庫位本部にあるでしょ？」

ミラアルク「しっかし、スイフトスポーツ？て言うのか？この車…あの車よりはえーな！」

ヴァネツサ「…ええ！倍位に速いわね」

エルザ「これで、早くつけそうですね！」

モジ…モジ…

エルザ「…？モジモジしてどうしたでありますか？」

ミラアルク「…トイレ行きたいんだぜ」

エルザ「因みにどっちの方ですか？」

ミラアルク「え…？小さい方だぜ」

ヴァネツサ「トイレ…？あ！こんな所にコンビニが！ミラアルクちゃん？行ってきて良いわよ」

ミラアルク「そうするぜ」

ヴァネツサ「飲み物とか食べ物買ってきてくれる？」

エルザ「私めは紅茶、菓子パンで」

ヴァネツサ「…お茶とおにぎり」

ミラアルク「…分かったぜ行つてくるぜ」

スタ：スタ

エルザ「隣はライダーさんですかね？カッコいいバイクが止まってるであります」

カパツ

エルザ「!？」

ヴァネツサ「エルザちゃん…？」

エルザ「あれは…翼であります！」

ヴァネツサ「!？シンフォギア装者の？」

エルザ「隣は黒服忍者です！」

翼「緒川さんのNinjaは緑なんですネ」

緒川「個人的にNinjaと言えば緑のイメージがありまして…緑にしました」

翼「私のKatanaは青…奏も実は乗っててな…」

緒川「奏さんも!？」

翼「ああ、確か…隼だったかな」

緒川「隼…Katanaの翼さんと奏さんの隼で…」

翼「敵を斬りつつ隼で抜く…いいなあ。うん？隣の車…から視線を感じるのだが…気のせいかな？」

緒川「スイフトスポーツですか？しかし、ガラスにカーテンがしてあつて中は覗けませんね」

ミラアルク「よく今帰ったぜ！」

翼「ミラアルク!？」

ミラアルク「は？誰だよミラアルクって」

翼「…人違いか、失礼した」

ブロロ

ミラアルク「なんで…シンフォギア装者が！」

エルザ「…分からないであります」

ヴァネツサ「ミラアルクちゃん、買うのも買ってきてくれた？」



ミラアルク「はいよ」

三人は朝ごはんを食べ、一路横浜港を目指す。

ヴァネツサ「…クツ。後ろからバイクの二人が…進路を譲るわね何よ…結構、煽るじゃない」

翼「先程の…スイフトスポーツか」

緒川「この先、700メートルで目的地ですね」

翼「了解した。」

ブロロ

ヴァネツサ「追いますか！」

エルザ「ガンス！」

ミラアルク「了解だぜ！」

暫く追うと墓地に入っっていった。

ヴァネツサ「墓地？何かあるのかしら？」

エルザ「あそこにあります！」

ヴァネツサ「近くに行くんじゃないやなくてこの辺りで…」

翼「…お祖父様は名前も無しにこの、墓とは…」

緒川「風鳴訃堂は…良くも悪くも歴史に名を残す事となってしまうかもしれませんが。そうなると八紘さんの墓に入れると荒らされてしまう恐れがある為…このようにしたと司令から伺いました。」

翼「…そうか、祈れるだけ有り難いか！」

フツ

翼「何奴!?あれは…ノーブルレッド?くっ…太陽が眩しいくて…

ハッ、消えた」

緒川「どうされました？」

翼「あそこの影からノーブルレッドが見ているように見えたのだが…見間違えだろうなあいつらは軌道上で消え去った筈であるからな」

緒川「きつと…彼女達も偲んでくれているのですよ」

翼「ああ…そうであろうな！」

ヴァネツサ「危なかったわね…」

エルザ「バレては無いとは思いますが」

ミラアルク「早く行こうぜ」

ブローく

そして、彼女達ノーブルレットはsong本部にたどり着き  
装者と合流した。

次回作予告

「シエム・ハさんと一旦の別れしかし、装者の願いとは裏腹に

人類の争いが終わる…そんな事は無かった。裏世界でアルカ・ノイズが暗躍する事となり更に過激な物となる。

そこで、立花響はとある少年と邂逅する…

それは、彼女の原点…彼女の胸の歌、ガングニールとの出会い。

果たして、彼女は自分の原点を…断ち切れる事は出来るのか!?

次回、戦姫絶唱シンフォギア 愛トフマデ愛オモフマデ

お楽しみに!